

海外における看護学教育機関と保健医療機関の 連携に関する研究の現状

飯野京子¹ 亀岡智美¹ 松山友子¹ 工藤快枝²
長尾信子² 石岡明子³ 渡辺輝子³ 竹尾恵子¹

1 国立看護大学校；〒204-8575 東京都清瀬市梅園1-2-1 2 国立国際医療センター 3 国立がんセンター中央病院
iinok@adm.ncn.ac.jp

Current Status of Research Overseas on Unification between Institutions for Nursing Education and for Health Care

Keiko Iino* Tomomi Kameoka Tomoko Matsuyama Yoshie Kudo Nobuko Nagao
Akiko Ishioka Teruko Watanabe Keiko Takeo

*National College of Nursing, Japan ; 1-2-1, Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒204-8575, Japan

【Abstract】 Purpose : To clarify the current status of research overseas on unification in institutions for nursing education and for healthcare aimed at developments between these institutions, and to gain insight into the development of a system appropriate for Japan. Methods : We searched the literature from 1966 to 2001 in MEDLINE and CINAHL using the keywords-unification, collaboration, integration, and cooperation. We analyzed the papers by year published, the type of research, design, subjects, and the content. The validity of the analysis was obtained through discussions with co-investigators. Results and Discussion : There were seven research studies that were applicable : Four were surveys, one was case study, one was action research and the other was a historical study. The contents of each were classified in the following five categories. 1. To analyze receptivity to the proposed introduction of the unification among nurse faculty. 2. Actions and evaluation of collaboration between institutions of nursing education and health care. 3. To compare types of unification model. 4. Evaluation of joint appointments in unification institutions of nursing education and health care. 5. History of the development of unification models between institutions of nursing education and health care. The results reveal the need for more studies on unification between institutions of nursing education and health care in Japan. The contents showed certain problem areas implementing unification, such as making allowances for the ability of faculty and nursing staff, clarification of nursing roles and sustaining communication between institutions of nursing education and health care.

【Keywords】 看護 nursing, ユニフィケーション unification, コラボレーション collaboration, インテグレーション integration, コーポレーション cooperation

1. はじめに

今日、我が国の看護界においては、教育と実践の相乗的な質向上を目指すとともに、実践と有機的に関連した研究の推進に向け、看護学教育機関と保健医療機関の効果的な連携が模索されている。この模索は、米国の取り組みの紹介¹⁾を契機とし、既に1970年代よりいくつかの看護学教育機関と保健医療機関において開始された²⁾。しかし、その実際や成果に関する研究は行われないうまま、昨今になり改めて関心が高まってきたという状況である。例えば、雑誌がその特集において³⁾、あるいは、看護系学会が特別講演やシンポジウムのテーマとして看護学教育機関と保健医

療機関の連携を取り上げている^{4,5)}ことは、このことを如実に表している。我が国の看護の実情や特徴に適した、看護学教育機関と保健医療機関の連携を促進する効果的なシステムを開発することは、今日の重要な課題である。

一方、米国は、この看護学教育機関と保健医療機関の連携への取り組みに、既に1960年代より本格的に着手した⁶⁾。また、米国を模範とし、イギリス⁷⁾、オーストラリア⁸⁾等、諸外国においてもこの実現に向けての努力がなされた。米国をはじめとし、諸外国における研究を概観することにより、わが国の看護の実情や特徴に適し、効果的な連携を進めるためのシステム開発に向けての示唆を得られる可能性が高い。そこで、次の目的の達成に向け本研究を行った。

II. 研究目的

海外における看護学教育機関と保健医療機関の連携に関する現状を明らかにし、我が国におけるその効果的な連携に向けての課題を考察する。

III. 研究方法

1. 対象文献の選定

次の方法により対象文献を検索した。すなわち、二次資料にはCINAHLとMEDLINEを用いた。検索期間は、CINAHLが1982～2001年、MEDLINEが1966～2001年であった。キーワードにはnursing, collaboration, integration, cooperation, unificationを用いた。その結果、総数1,330件の文献が検索され、タイトルと要約から看護学教育機関と保健医療機関の双方の発展に関する文献を抽出した。該当文献は174件であり、このうち133件が入手可能であった。そこで、各文献の内容を精読し実践報告や概説を除いた結果、7件が研究論文であることを確認し、この7件⁷⁻¹³⁾を本研究の分析対象とした。

2. 対象文献の分析

分析には、先行研究¹⁴⁾を参考に開発した分析フォームを用い、発表年、研究デザイン、データ収集方法、研究者の所属、データ収集フィールド、研究対象、研究内容を明らかにするとともに、用いられている看護学教育機関と保健医療機関の「連携」を表す用語を検討した。分析の適切性は共同研究者間の検討を通して確保した。

IV. 結果

1. 対象文献の概要

発表年は、1980年代が3件、1990年代が2件、2000年代が2件であった。

研究デザインは、4件が調査研究、1件が事例研究、1件がアクションリサーチ、1件が歴史的研究であった。

データ収集方法は、調査研究のうち3件が質問紙法、1件が電話調査によりデータを収集していた。また、事例研究においては、質問紙法・観察法・面接法が併用され、アクションリサーチにおいては、質問紙法・面接法が併用され、歴史的研究においては、史料がデータとして用いられた。さらに、質問紙法や面接法を用いた研究6件は、全て看護学教員を対象としており、このうち1件が看護師、1件が看護師と看護学生からもデータ収集を行っていた。

研究者(第一著者)の所属は、4件が看護学教育機関に所属する教員、2件が博士課程在籍者、1件が保健医療機関

に所属する看護職であり、看護学教育機関と保健医療機関に併任している者による研究は存在しなかった。また、7件中3件が単著、4件が共著であり、共著者がいる4件中1件は、看護学教育機関に所属する教員と保健医療機関に所属する看護職による共同研究であった。

データ収集フィールドは、5件がアメリカ、1件がオーストラリア、1件がイギリスであった。

2. 看護学教育機関と保健医療機関の「連携」を表す用語

7件の研究においては、看護学教育機関と保健医療機関の「連携」を表す用語として、ユニフィケーション(unification)^{9,10,12,13)}とコラボレーション(collaboration)^{7,8,11,12)}が用いられていた。

ユニフィケーションは、1956年、フロリダ大学看護学部の創設時に教育と実践の乖離を解消するために始められたシステムである。このシステムの特徴は、看護学教育機関と保健医療機関が同一の設置主体、管理、予算の下に運営され、同一の看護職が学生への教育と患者・クライアントへの看護実践の両方に責任を持つことにある。

コラボレーションは、1961年、ケース・ウエスタン・リザーブ大学看護学部とクリーブランド大学病院の看護部門で始まったシステムである。このシステムの特徴は、看護学教育機関と保健医療機関が異なる設置主体、管理、予算の下に運営されるとともに、同一の看護職が両機関に併任することにある。したがって、同一の看護職が、実質的には看護学教育における学生の教育と保健医療機関における看護実践に携わるという点において、ユニフィケーションとの共通性を持つ。

3. 研究内容

7件の研究内容は、共通性に着目した結果、【1. 看護学教員のユニフィケーションに対する意識の調査】【2. 看護学教育機関と保健医療機関連携の試みとその評価の解明】【3. 看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルの比較】【4. 看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者設置の評価】【5. 一看護学教育機関と保健医療機関におけるユニフィケーションの歴史の解明】の5種類に分類できた(表1)。以下、この分類にそって概要を記述する。

1) 看護学教員のユニフィケーションに対する意識の調査

看護学教員のユニフィケーションに対する意識を調査した研究は2件存在し、1985年と1986年に発表されていた(表1のA⁹⁾, B¹⁰⁾)。これらは同じ研究者によるものであり、その目的はいずれもユニフィケーションを導入すると仮定した場合の教員の認識を明らかにすることであった。

無作為に抽出したユニフィケーションを導入していない

看護系大学 127 校の教員を対象に、郵送法による質問紙調査を行い、222 名から得られた回答を分析した結果は、次のことを明らかにした。

すなわち、1 件(研究 A)は、自分が教育においても臨床においても効果的に役割を果たせると知覚している教員がそうでない教員よりもユニフィケーションに対する積極性が高いことを明らかにした。また、同時に、ユニフィケーションに対する積極性と職位との関連が認められないことも明らかになった。

他の 1 件(研究 B)は、前述の研究と同様に、教員のユニフィケーションに対する積極性に着目し、学位、終身在職権獲得に向けた博士の学位取得の必要性との関係を探索した。結果は、博士の学位を持つ教員がそれを持たない教員よりもユニフィケーションの受け入れに消極的であることを明らかにした。研究者は、この要因として、博士の学位を持つ教員は、ユニフィケーションによって求められる実践能力が低いことを挙げ、これは博士の学位取得過程において研究活動を優先した結果に起因すると指摘していた。また、博士の学位を持つ教員が研究活動を期待され、ユニフィケーションに伴い実践に時間を費やすことを負担に感じていることも挙げていた。さらに、博士の学位を持たない教員のうち、博士の学位取得が終身在職権獲得の要件となっている教員は、そうでない教員よりも、ユニフィケーションに対し消極的であった。研究者は、この要因として、博士の学位を持ち研究活動への期待の強い教員と同様に、ユニフィケーションに伴い実践に時間を費やすことへの負担感を挙げていた。

2) 看護学教育機関と保健医療機関連携の試みとその評価の解明

看護学教育機関と保健医療機関の連携の試みとその評価を解明した研究は 2 件存在した(表 1 の C¹¹⁾, D⁷⁾)。

1 件(研究 C)は 1989 年に発表された論文であり、看護系大学・短期大学・専門学校各々が保健医療機関と連携して実施したプロジェクトの成果を評価していた。大学が保健医療機関と連携して実施したプロジェクトとは看護研究の推進であり、短期大学は手術室看護、専門学校は精神科看護の学生に対する教育の質向上をめざすプロジェクトを実施した。各プロジェクトの評価においては、看護師に対する質問紙調査や面接、カンファレンスや会議の観察等を通して収集したデータが質的に分析された。

研究結果は、看護学教育機関と保健医療機関の連携による利点として、次の 3 点を示した。①学生に対し、現実の看護ニーズに合致し、しかも看護学教育機関と保健医療機関双方の状況に柔軟に対応した教育を実施できる。②実践的な教育を受けることにより学生の学習意欲が高まる。③専門分野を持ち研鑽することの重要性に対する看護師の認識が高まる。また、研究結果は、看護学教育機関と保健医

療機関の連携を効果的に進めるために、次の点が重要であることを明らかにした。それは、教員と看護師がともに教育・実践相互の価値と必要性を理解し、十分にコミュニケーションを図り、プロジェクトの実現に必要な時間や場所、人の配置等を具体的に設定し、綿密な計画を立案することであった。

他の 1 件(研究 D)は 2000 年に発表された論文であり、教員と看護師が共同して学部学生の教育を行い、このような取り組みが学生、教員、看護師に及ぼす効果を探求した。この研究は、アクションリサーチの手法を用い、問題解決に向けた計画立案・実施・評価という循環過程を 3 回繰り返していた。初回の循環においては、学生の疾患に関する理解不足と看護師の看護基礎教育に対する理解不足という 2 つの問題を特定し、その解決に向けて次のことを実施した。すなわち、学生の疾患に関する理解不足に対しては、実習中に講義時間を設けることを試みた。また、看護師の看護基礎教育に対する理解不足に対しては、毎週定期的に看護師と教員の両者が参加する会議時間を設けることを試みた。しかし、5 か月間の実施後も成果の確認が困難であったため、2 回目の循環においては成果の研究的解明を試みた。また、この研究の成果に基づき、3 回目の循環においては学生に対する教育計画を修正した。最終的に、このような取り組みは、学生にとって、理論を実践に用いることに対する理解の深化につながった。また、看護師が自己の実践を評価するとともに教育者としての役割を認識すること、および、教員が臨床における実践を踏まえた教育、看護師を支援するリエゾンの役割、看護師との共同研究による実践的な研究推進や指導的な役割を遂行することの重要性を見いだした。

3) 看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルの比較

看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルを比較した研究は 1 件存在した(表 1 の E¹²⁾)。これは 1990 年に発表された論文であり、看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルにより、教員の学術的生産性や職務満足度がどのように異なるかを探求した。このモデルには、ユニフィケーションモデル、コラボレーションモデル、セパレーションモデルがあり、ユニフィケーションモデルとコラボレーションモデルは、それぞれ「2. 看護学教育機関と保健医療機関の連携を表す用語」の項に述べた特徴を持つモデルであった。セパレーションモデルとは、看護学教育機関と保健医療機関が協力関係を持っているものの設置主体も予算も異なり、両機関に併任する者も存在しない形態を指す。

この研究は、郵送法による質問紙調査を行い、16 大学に所属する 429 名の看護学教員から収集した回答を分析した。429 名中 114 名がユニフィケーションモデル、166 名

表 1 海外における看護学教育機関と保健医療機関の連携に関する研究の概要

研究の分類	発表年	目的	研究デザイン	データ収集方法	対象	対象者数	結果
看護学教員のユニフィケーションに対する意識の調査	A 1985	看護学教員のユニフィケーション導入に対する意識：職位による比較	調査	質問紙	看護学教員	222	① 教育と臨床両方に効果的に役割を果たせると知覚している教員がユニフィケーションへの積極性が高い ② ユニフィケーションへの積極性と職位との関連が認められない
	B 1986	看護学教員のユニフィケーション導入に対する意識：学位、大学が終身在職権獲得に博士の学位取得を要求しているか否かによる比較	調査	質問紙	看護学教員	222	① 博士の学位を取得している教員は受け入れが積極的 ② 博士の学位取得を目指している教員は受け入れが積極的
看護学教育機関と保健医療機関連携の試みとその評価の解明	C 1989	大学・短大・養成所と保健医療機関との連携の評価	事例研究	質問紙, 面接, 観察	看護学教員 看護師	3つのプロジェクト	① 学生に対し現実に合致し, 柔軟な教育を展開 ② 実践的教育を受けることにより学生の学習意欲向上 ③ 臨床看護師の専門分野を研鑽する認識が向上 ④ 効果的な連携推進に重要な点は, 教育・実践相互の価値と必要性の相互理解, 十分なコミュニケーション, 綿密な計画(時間, 場所, 人の配置等)
看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルの比較	D 2000	看護学教員と臨床看護師の共同による学生への教育活動への評価	アクションリサーチ	質問紙, 面接	看護学教員 看護師 看護学生	35	① 学生は理論を実践に用いることに対する理解の深化 ② 看護師自身の実践を評価し教育者として役割を認識 ③ 教員は, 看護師を支援するリエゾンの役割, 臨床における実践を踏まえた教育, 看護師との共同研究における役割を見いだした
看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルの比較	E 1990	連携の3つの異なった連携モデルと看護職者としての学術的生産性, 職務満足度との関係	調査	質問紙	看護学教員	451	学術的生産性においても職務満足度においても連携の基盤となるモデルによる差異は認められない
看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者設置の評価	F 2000	看護学教育機関と保健医療機関との併任のポストにおける役割, 課題	調査	電話面接	看護学教員 であり, 看護師の併任者	8	① 併任者の役割は, 教育・研究推進, 保健医療機関の組織運営へ影響を及ぼすこと ② 教育者として看護の成果向上, 臨床家として学術的活動を進める重要性を知覚 ③ 保健医療機関における位置づけが不明確な場合が多く, その確立が課題
一看護学教育機関と保健医療機関におけるユニフィケーションの歴史の解明	G 1994	ラッシュェ大学と同一設置主体の医療センターにおけるユニフィケーションモデルの発展の歴史	歴史的研究	史料	史料		① ラッシュェ大学看護学部が1968年に創設時, ユニフィケーションを開始 ② 併任の臨床教員(修士以上の看護師であり看護実践, 授業・実習指導, 研究の役割)を任命 ③ 経済性重視の観点からユニフィケーションは行われなくなってきた。

がコラボレーションモデル、149名がセパレーションモデルを基盤に保健医療機関と連携している看護学教育機関に所属していた。分析結果は、学術的生産性においても職務満足度においても連携の基盤となるモデルによる差異は認められないことを示した。

4) 看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者設置の評価

看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者の設置を評価した研究は1件存在した(表1の研究F⁸⁾)。これは2000年に発表された論文であり、看護学教育機関と保健医療機関に併任している者の役割、課題などについて探求した。看護系大学の教授であり病院の看護部長でもある者8名を対象とし、電話による半構造化面接を行った結果は、次の3点を明らかにした。すなわち、看護学教育機関と保健医療機関の併任者は第1に、教育・研究を推進するとともに、患者への看護に関わる保健医療機関の組織運営に影響力を及ぼしていた。第2に、教育者として臨床と密接に連携し、患者への看護の成果を高めるよう努力する必要性とともに、臨床家として学術的活動を進める重要性を知覚していた。第3に、保健医療機関における命令系統が不明確な場合が多く、その確立を課題として知覚していた。

5) 一看護学教育機関と保健医療機関におけるユニフィケーションの歴史の解明

一看護学教育機関と保健医療機関におけるユニフィケーションの歴史を解明した研究は1件存在した(表1の研究G¹³⁾)。これは、1994年に発表された論文であり、キリスト教系の米国ラッシュ大学と同一教会を設立主体とする医療センターにおけるユニフィケーション発展の経緯を探求していた。出版されている文献、病院・大学における報告書等や文書類をデータとして収集、分析した結果は、次のことを明らかにした。

すなわち、ラッシュ大学看護学部は、病院附属看護学校の発展的解消により、1968年に創設された。創設時の看護学部長は、臨床と教育の組織の統合が看護の専門性を高めるために重要であると考え、病院長と協力してユニフィケーションを推し進め、自らは病院の看護部長を兼務した。このユニフィケーションにおいては、修士以上の学位と高度の実践能力を有する看護師が臨床教員(practitioner-teacher)として任命された。臨床教員は、保健医療機関においては、看護実践を行うとともに、スタッフ看護師の相談者として機能した。また、看護学教育機関においては、学内の授業や実習指導を担当した。さらに、このような活動を通して、学生や他の看護師に対するロールモデルとなるように努めた。加えて、研究活動も積極的に行い、現実の実践における課題の明確化、患者への看護の質改善に役立つ研究の実施、看護基準の作成等の役割も担っ

た。

ラッシュ大学のユニフィケーションモデルは、開始後の10年間を通し国内外の模範とされ、様々な大学が同様の取り組みを行った。しかし、その後、ヘルスケア改革に伴う経済性の重視を背景に、米国においては減少し、現在は、ラッシュとロチェスターの2大学のみがこのシステムを継続している。また、ラッシュ大学においては現在、臨床教員の存在は継続しているものの、大学の看護学部長は医療センターの副看護部長との兼務となり、教育と実践の予算が独立する等、その様相が変化してきている。

研究者は、正確な経済的評価を行うことなくこのような変化が起こっていることに着目し、ユニフィケーションの経済的評価を行う必要性を指摘した。

V. 考 察

MEDLINEとCINAHLを用いて諸外国における看護学教育機関と保健医療機関の連携に焦点を当てた研究論文を検索した結果、7件の研究が存在した。これは、看護学教育機関と保健医療機関の連携に関し、既に40年以上の歴史があるにもかかわらず、それに焦点を当てた研究がわずかしち行われてこなかったことを示す。看護実践・教育・研究のいずれにおいても、そのプロセスの根拠を研究成果に求めることは重要であり¹⁵⁾、これは、わが国における看護学教育機関と保健医療機関の連携を進めるに当たり、実際の活動とともに常に研究的に実態や成果を解明していく必要性を示す。

例えば、米国においては、連携の一形態であるユニフィケーションが、さまざまな看護系大学と病院との間で取り組まれてきたにもかかわらず、現在、これを実施しているところはラッシュ大学とロチェスター大学のみとなっている¹³⁾。このことは、看護学教育機関と保健医療機関のユニフィケーションが、研究による十分な評価を行うことなく衰退したことを意味すると同時に、その背景にはユニフィケーションの継続を困難にする何らかの要因があった可能性がある。我が国においても、ユニフィケーションに対する関心は高く^{3~5)}、米国における看護学教育機関と保健医療機関のユニフィケーションが衰退した要因を探求することは、我が国においてユニフィケーションを着実に進めるための重要な課題である。

一方、看護学教育機関と保健医療機関の連携に関する研究は、わずか7件ではあったが、このうち3件は、看護学教育機関と保健医療機関の連携が看護学生、看護学教員、看護師各々に次のような成果をもたらすことを明らかにした。

すなわち、看護学生にとっては、実践的な教育を通じた学習意欲の向上、理論の実践への活用に対する理解の深化

という成果があった。看護学教員にとっては、実践を踏まえた教育の重要性の知覚、看護師に対するリエゾン役割、看護師との共同研究による実践的な研究推進や指導的役割遂行等の重要性の知覚につながった。さらに、看護師にとっては、専門性向上に向けた学習意欲の喚起、看護実践者としての自己評価と教育者としての役割認識が起こっていた。

これらは、看護学教育機関と保健医療機関の連携が看護学生はもとより、教育機関や保健医療機関に所属する看護職者の進歩・向上を促進し、それを通じた看護実践・教育・研究の質向上を期待できることを示唆する。しかし、併任者設置の評価を試みた研究がその成果として教育・研究の推進や保健医療機関の組織運営に対する看護職の影響強化を示していたことを除き、看護学教育機関と保健医療機関の連携が看護実践・教育・研究の質に直接的にどのような成果をもたらすかについて明らかにした研究は存在しなかった。看護学教育機関と保健医療機関の連携の第一義的な目的は、看護実践・教育・研究相互の有機的な関連を通じたその質の向上である¹³⁾。わが国における看護学教育機関と保健医療機関の連携を進めるに当たっては、それが看護実践・教育・研究の質向上にどのように貢献しているかに常に関心を持ち、研究的評価を継続していく必要がある。

加えて、本研究が対象とした研究7件のうち4件は、看護学教育機関と保健医療機関の連携に伴う課題や効果的な連携に向けての課題を明らかにした。これらの課題は次の3点に整理できる。

- ① 看護学教育機関と保健医療機関の連携に対する積極性は、看護学教員や看護師個々の自己の能力に対する知覚、学位取得状況により異なる。
- ② 看護学教育機関と保健医療機関の効果的な連携に向けては、教員と看護師がともに教育・実践相互の価値と必要性を理解し、十分にコミュニケーションを図り、プロジェクトの実現に必要な時間や場所、人の配置等を具体的に設定し、綿密な計画を立案する必要がある。
- ③ 看護学教育機関と保健医療機関における併任者の設置に当たっては、特に保健医療機関における命令系統を明確にしておく必要がある。

これらのことは、わが国における看護学教育機関と保健医療機関の連携を進めるに当たってもこれらの点を事前に十分に検討しておく必要性を示唆する。例えば、ユニフィケーションであれコラボレーションであれ、看護学教育機関と保健医療機関の連携においては、同一の看護職が両方の機関に役割を持つことが推進される。しかし、両方の機関に役割を持つことに伴い併任者の仕事上の負担が質量ともに増加する^{16,17)}ことは容易に推測できる。そのため、併

任者を任命する際には、個々人の能力を客観的に評価するとともに、自己評価の状態を把握しておく必要がある。また、我が国においては、長年にわたり看護専門学校を中心に教育が行われてきたことを背景とし、多くの看護職者が学位取得を要望している¹⁸⁾。そのため、看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者の任命や新たな役割付与に際しては、個々人の学位取得に対する要望を考慮し、その実現に向かいつつ期待される役割を遂行できる環境を整える必要がある。

さらに、併任者の設置は、任命された看護職者にとって、命令系統の複雑化、役割期待の多様化を通じた役割葛藤や役割の曖昧さに対する知覚増大につながる可能性が高い¹⁹⁾。これらを防止し、併任者が効果的に機能できるためにも、看護学教育機関に所属する教員と保健医療機関に所属する看護師が、ともに教育・実践相互の価値と必要性を理解し、十分にコミュニケーションを図り、両者の連携実現に向けた綿密な計画を立案する必要がある。

なお、看護学教育機関と保健医療機関の併任者に関しては、大学の学部長や教授と病院の看護部長の併任といった管理上の最高責任者を対象とした研究が行われている一方、大学における講師や助手と看護師長や副看護師長といった立場の併任者を対象とした研究は行われていなかった。現在の看護学教育機関と保健医療機関に設置されている役職から見れば、多様な職位にある者の併任が可能であり、我が国においても、実際に、助手と副看護師長の併任が行われている²⁰⁾。このような併任者を対象とし、その設置に伴う利点や課題を明らかにしていくことも今後の課題である。

VI. 結 論

1. 看護学教育機関と保健医療機関の連携に関する研究は7件存在し、これらは、【1. 看護学教員のユニフィケーションに対する意識の調査】【2. 看護学教育機関と保健医療機関連携の試みとその評価の解明】【3. 看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルの比較】【4. 看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者設置の評価】【5. 一看護学教育機関と保健医療機関におけるユニフィケーションの歴史の解明】を試みていた。

2. わが国における看護学教育機関と保健医療機関の連携を進めるに当たっては、実際の活動とともに常に研究的に実態や成果を解明していく必要がある。

3. 看護学教育機関と保健医療機関の連携においては、看護学教員や看護師個々の自己の能力に対する知覚や学位取得状況の考慮、参画する看護職者による教育・実践相互の価値と必要性の理解、十分なコミュニケーション、具体的かつ綿密な計画立案、併任者の設置における役割や組織

内の位置づけの明確化が重要である。

4. 米国における看護学教育機関と保健医療機関のユニフィケーションが衰退した要因の解明, 看護学教育機関と保健医療機関の看護職として最高責任者の立場にある者のもとよりその命令系統下に属し併任者としての役割を担う者を対象にした利点や課題の解明は, 今後の重要な研究課題である。

■文献

- 1) Nayer, D. D. : 看護のユニフィケーション—現場と教育の統合, 小玉香津子, 看護, 33(2), 28-39, 1981.
- 2) 成瀬妙子: 婦長・看護教員併任制度下における臨床実習の受け入れ, ナースステーション, 6(1), 1976
- 3) 新道幸恵 他: 教育と臨床の実践的連携をめざして, 看護教育, 41(7), 510-522, 2000.
- 4) 新道幸恵: 看護におけるユニフィケーション, 看護, 54(4), 31-40, 2002.
- 5) 野口多恵子 他: 看護の進化のための教育・研究・臨床の連携, 看護, 54(4), 41-56, 2002.
- 6) Smith, D. M. : Education and service under one administration, Nursng Outlook, 13(2), 54-56, 1965.
- 7) Murphy, F. A. : Collaborating with practitioners in teaching and research : A model for developing the role of the nurse lecturer in practice areas, Journal of Advanced Nursing, 31(3), 704-714, 2000.
- 8) Dunn, S. V., et al. : The role of Australian chaires in clinical nursing, Journal of Advanced Nursing, 31(1), 165-171, 2000.
- 9) Yarcheski, A, et al. : The unification model in nursing : A study of receptivity among nurse education in the United States, Nursing Research, 34(2), 120-125, 1985.
- 10) Yarcheski, A, et al. : The unification model in nursing : Risk-receptivity profiles among deans, tenured and nontenured faculty in the United States. Western Journal of Nursing Research, 8(1), 63-81, 1986.
- 11) Malloy, C., et al. : Collaboration projects between nursing education and nursing service : A case study, Nurse Education Today, 368-377, 1989.
- 12) Awrey, J. M. : Organizational model, job satisfaction, and productivity of nursing faculty in academic health centers, doctoral dissertation, The University of Michigan, 1990.
- 13) Fislil, BA. : A history of the Rush University, College of Nursing and the development of the unification model, 1972-1988, doctoral dissertation, Loyola University of Chicago, 1994.
- 14) 舟島なをみ 他: 過去5年間の看護学研究の動向と今後の課題, 看護教育, 35(5), 392-397, 1994.
- 15) Polit, D. F., Hungler, B. P. : Nursing Research, J. B. Lippincott Co., 1991.
- 16) 上泉和子 他: ユニフィケーションの実際, 看護教育, 506-507, 2000.
- 17) 小松美穂子: 大学付属病院でユニフィケーションを実践して—茨城県立医療大学におけるユニフィケーション1年目の現状と課題, Quality Nursing, 4(4), 292-296, 1998.
- 18) 舟島なをみ 他: 看護専門学校を卒業した看護婦・士の学位取得に関する研究—専門職の能力と学位取得ニーズの関連, 千葉大学看護学部紀要, 22, 1-5, 2000.
- 19) 森岡清美 他編: 新社会学辞典, 1430-1431, 有斐閣, 1993.
- 20) インタビュー, 4月開講の国立看護大学校長 竹尾恵子大学校長に聞く, 看護教育, 42(2), 304-305, 2001.

【要旨】 目的: 看護学教育機関と保健医療機関双方の発展に向けた連携に関し, 海外における研究の現状を解明し, 我が国におけるその効果的な連携に向けての課題を考察する。 **研究方法:** MEDLINE, CINAHL を用いて, unification, collaboration, integration, cooperation をキーワードに 1966 年から 2001 年までの文献を検索し, 内容の精読を通して看護学教育機関と保健医療機関双方の発展に向けた連携に関する研究論文を選定した。分析の項目は, 発表年, 研究デザイン, データ収集方法, 研究者の所属, データ収集フィールド, 研究対象, 研究内容, 「連携」を表す用語であった。分析の適切性は共同研究者の検討を通して確保した。 **結果および考察:** 該当する研究論文は7件であり, 4件が調査研究, 1件が事例研究, 1件がアクションリサーチ, 1件が歴史研究であった。研究内容は【看護学教員のユニフィケーションに対する意識の調査】【看護学教育機関と保健医療機関連携の試みとその評価の解明】【看護学教育機関と保健医療機関の連携基盤となるモデルの比較】【看護学教育機関と保健医療機関の連携に向けた併任者設置の評価】【一看護学教育機関と保健医療機関におけるユニフィケーションの歴史の解明】の5種類に分類できた。このように看護学教育機関と保健医療機関の連携に関する研究数は少なく, わが国における実施には研究を行っていく必要性が示された。また, ユニフィケーションの実施には, 看護職の能力の考慮, 職位の位置づけの明確化, 双方にコミュニケーションを保つこと等の課題が示唆された。
